

平成 21 年 12 月 12 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中齋塾 東京フォーラム

平成 21 年 第 11 回講話

視点・・・沖縄で感じたこと

先日、私は沖縄に行ってきました。そこで感じたことを申します。

総合的直観力で言うと、沖縄は独立の方向に進んでいると感じました。もともと琉球王国でしたから、明治維新の際に廃藩置県で日本に併合された地域だという歴史的な経緯を考えれば、それほどおかしな話ではありません。好むと好まざるとにかかわらず、独立の方向に進んで行くであろうと思いました。

それを考える上においては、本質・大局・歴史の観点で考える必要があります。日本という国が置かれている現状を眺めた時に、ロシアは北方領土を返す動きはありません。ソ連はもともと北海道を丸ごと欲しいわけで、北方領土だけで我慢するわけではない。国民性から見て、北海道を丸ごと取るためにはどうしたらよいか、相変わらずどこかの機関で考えているはずだと思います。

世界全体を眺めると、日本は番外の国です。アメリカとソ連が世界各国で色々な代理戦争をしています。そうすると日本の沖縄を丸ごと基地化したいとアメリカが考えてもおかしくはない。であれば、沖縄を独立させることによって日本から切り離し、アメリカの思う如く動かせるし、沖縄すべてを基地にしてみたいと思ってもおかしくはない。

アメリカとソ連に対して、割って入ってきている中国はどうでしょうか。中国は日本を丸ごと取りたいのですが、それは出来ないだろうから属国化をしたいと思います。完全に下請け化、植民地化したいと中国は日本のことを考えているであろうと感じます。

アメリカとロシアと中国、それらの国々の狭間で日本はどのような動きをすべきなのか、考えねばならないでしょう。

<沖縄は独立国家への方向性で好むと好まざるとにかかわらず動き出している>、沖縄に行って感じたこの感覚を裏付ける為に、世界各国のパワーバランスを見て、より一層思いを強くしました。そう外れた動きではないと思います。

これは一つの視点です。<そう感じた>ということが大事なのです。何事によらず、中齋塾フォーラムでは自分自身が如何に感じたか、何を感じたかを重んじます。その時に私

利私欲が混っていなければ、それは十分検討に値するべきものと考えます。それは陽明学の中で「良知」と言われるものの中の一部であると思っています。

今日、死んでも大丈夫？

今年最後の東京フォーラムですから、今年一年間を考えてください。

今年一年間、悪意をもって嘘をついたことがありますか？

(・・・いませんね)

今年一年間、善意で、相手を救おうと思って嘘をついた方？

(・・・大半の人の手が挙がる)

この辺で嘘というものの本質が垣間見えてくるように感じます。

昨日一日で結構です。有難うと言ひ、有難うと言われた方？

(・・・沢山手が挙がる)

今日、急に死んでも大丈夫な人は手を挙げて下さい。

これは滅多にしない質問ですが、心持ちの問題です。自分の後始末、家庭の後始末、色々な後始末があります。私は還暦に入ってから、物を処分しています。皆さんも経験があるかと思いますが、片づけようと思っても、これは思い出のあるものだからとか、保留しておこう・・・となって、結局片付けられるものはせいぜい1割あるかないくらいです。だんだん年がいくにしたがって身体が思うように動かなくなるのに、処分するものが増えます。ですから処分するスピードを上げなければならないと思っています。

知足

皆さんは今年一年、中齋塾フォーラムで何を覚えてくださいましたか。基本的に中齋塾フォーラムでは、知足という考え方が自然と身に付いてくると良いと思っています。もっと、もっと・・・ではなく、ほどほどという考え方が染み込むようになると良い。

知足を支えている考え方は陽明学です。陽明学の中では、「知行合一」「事上磨錬」「良知」という考え方があります。その中で私は、今年は「知行合一」(知るは行の始めにして、行は知るの成れるがなり)という言葉をもとに、自分自身で締めくくりに言葉として心に染み込ませたいと思っています。思ってもなかなか行動には出ません。行動に出ないでいると、ただ上滑りの知識だけになります。

私は陽明学を勉強する前に、木内信胤先生にももの考え方を教えて戴きました。それは判断の三原則と総合的直観力です。木内信胤の哲学と陽明学が相まって、知足という考え

方を形作っています。もう一つ、安岡正篤先生の考え方も入っています。後ほど、安岡干支学について少しお話致します。ですから安岡正篤先生、木内信胤先生、王陽明といったものの考え方が相まって、知足という考え方が出来上がっているとお伝えしておきます。

心に残る言葉

本日は、西晋一郎先生の言葉をご紹介します。

書を読むときにはごくすなおに理解せねばならぬ。他人の説がよくわかれば自分の説が生まれてくるので、生かじりではいくら読んでも自分のものが生まれて来ない。

『西晋一郎の生涯と思想』 縄田二郎著 五曜書房

倫理の事に触れている方は、相当勉強しなければならない人です。西の西、東の西田(幾太郎)と言われる哲学者です。

経済と干支の話

中斎塾の回覧版に代表幹事が書かれておられましたが、この経済状況の中で、国会議員はお給料を10%カットしても足りないと思います。カットしようと思って実行しつつあるのは悪いことではありません。ただ、今の感覚だったら50%カットしても良いのではないのでしょうか。何回も申しますが、わずか2日間の在籍で1ヶ月分の給料を貰ったのは、とんでもないと思います。前回ご紹介しましたが、「カレント」という月刊誌に執筆を頼まれまして、その辺のことを「鉄面皮の議員」と書いておきました。この雑誌は議員さんに送られているようですので、反応があれば良いと思っています。

来年は、庚寅(こういん・かのえとら)です。安岡先生の書いたもので説明しますと、庚という文字は、去年の動きを引き継ぎます。経済不況を引き継ぐ。それから、償うべきものを償います。償わなければ事態はそのままですが、償えば、改めて新しいものが生まれます。ですから、特に政治家が償う気持ちがあれば、改まって新しい良い年に向かって進んでいくことができる。そのポイントの一つが寅です。「大人虎変し、君子豹変す」という言葉があります。大人とは内閣総理大臣のことです。虎変とは、秋から冬にかけて虎の毛が目を見張るくらい鮮やかな色に生え変わることです。転じて人間に対しては、今までの言動と比べて、びっくりするくらい鮮やかな思想や行動の変化が見られる。そしてその結果として、君子(周辺の大臣たち)が豹変する。虎ほど鮮やかに変わらないけれども、

豹なりに変わるということです。大人が虎変するようであれば、来年は良くなるでしょう。

しかし、見たところ大人（鳩山首相）は虎変しないと思います。子供手当を親から毎月1500万円、トータル9億だか10億円もらって、「知りませんでした」というようでは、そうそう虎変しないだろうと思います。どうも贈与税を払って終りにするつもりでしょうが、最初から税金を払っておけば良いものを、払わないから叩かれるもとなるわけです。多分それがもとで総理大臣を辞めなければならなくなるだろうと思います。普天間の問題もそうですが、あちらこちらに良い顔をしようとして、今、雪隠詰めにあっている状況だと思っていますので、来年、そういう人が虎変するわけがない。

虎変しないとすると、今年の頃は、「来年は経済不況のトンネルに入って、出口が見えない」と言いましたが、今年も同じ事を言います。経済不況は来年一年間続くでしょうし、でこぼこ道が更に酷くなるから、跳ね上がったたり落ち込んだり、あちこちに頭をぶつけて瘤を作ったりというような動きで、かなり酷い不況が続くだろうと思います。お給料がなくなるとか、収入が減るとか、考えていないような問題に来年一年間は直面するだろうと思います。

ただ、知識・見識・胆識があります。知識として来年はこうなると思ったなら、私はその時こうしたいと決めておくことが見識です。そしてそれを実行するのが胆識です。ですから実行する為に、来年は準備しておく年だと思っています。

例えば新型インフルエンザについても、今の豚の新型インフルエンザが終息しないうちに、本来恐れている鳥の新型インフルエンザが始まるでしょうから、そうすると人の死に方は凄まじい数になると思います。今年私は自宅の玄関を改装し、家に入る前に外で手を洗えるようにしました。外で手を洗って、うがいできて、上着をぶら下げて風にさらせるようにしました。来年は一年間かけて、これを生活習慣にしようと思っています。その為の設備を終えました。後は実行です。これが多分、鳥の新型インフルエンザに対する準備になるだろうと思っています。

何かしようと思ったら、少しでもよいから行動しておく。少し行動すると、それが階段を一段上ったことになりまますから、もう一段上りたい、更にもう一段上りたいという気持ちにさせてくれます。

今日の論語

本日の論語は八佾第三 24～25 里仁第四 1～4章です。

ぎ ほうじん まみ こ いわ くんし ここ いた われいま かつ まみ え
儀の封人 見えんことを請いて曰く、君子の斯に至るや、吾未だ嘗て見ゆることを得

ずんばあらずと。従者之を見えしむ。出でて曰く、二三子、何ぞ喪えることを思えんや。天下の道無きや久し。天將に夫子を以て木鐸と為さんとすと。

衛の国の儀というところの国境を守る役人が、「偉い人が通る時、私はいつもお目にかかっています」と言って孔子に面会を求めました。孔子の従者は、君子がここに来ると必ず会っているのだから会わせなければならぬと考えて段取りをしました。

面会が終って、儀の封人が出て来て言いました。

「お弟子さん達よ。天下に道理が無くなって久しいけれども、もうそろそろ孔子の出番だ。天は孔子をもって世に警鐘を鳴らすだろう。当に天命だ」

木鐸とは木の鈴です。どういう音がしたのか分かりませんが、私が原稿を依頼された「カレント」も、木鐸のつもりで書こうと思っています。

子韶を謂う。美を尽せり、又善を尽せりと。武を謂う、美を尽せり、未だ善を尽さざるなりと。

帝王が天下を得ると、必ず楽曲を作って天地・貴人を祀ります。ここでは、帝位を譲られた者と、武力で相手を殺して帝位を奪った者に分けて考えています。

韶は舜帝が帝位を譲り受けて作った楽曲ですから、美的に素晴らしいし道徳的にも素晴らしいものがあると孔子が言いました。しかし周の武王が作った武という楽曲については、紂王を武力で滅ぼしたので、道徳的には及びがつかないと言っています。

孔子は音楽が好きです。人間らしい情感を生み育てる為に、音楽は必要・必須なのではないかと感じます。まさに癒しです。

子曰く、里は仁なるを美と為す。扱びて仁に処らずんば、焉んぞ知とするを得ん。

心の中に仁徳を持つ。仁徳を自分の心の安住地としている。そういう人は素晴らしいし、知者と呼んでよい、と解釈しました。

良い人が住んでいる所、風俗習慣の良い土地を選んで住みましょう、という解釈が一般的です。中斎塾フォーラムで学んでいる人は、自分自身の心の中に仁徳を持ち、それがだんだん広がって、その人が完成していき、地域にも広がっていくとお考え戴くと良いと思います。

しいわ ふじんしゃ もっ ひさ やく お もっ なが がく お じん
子曰く、不仁者は以て久しく約に処るべからず。以て長く楽に処るべからず。仁
しゃ じん やす ちしゃ じん り
者は仁に安んじ、知者は仁を利す。

心の貧しい人、私利私欲に絡まっているガリガリ亡者は、貧しい所にいるとだんだん染まってしまい、お金持ちの所にもおかしくなる。

対して、仁者（道徳的に完成している者）は、どこにいても人徳を失うことはないし、知者（知識を得ている人）は、仁というものを手段として利用活用するから、どこにいても変わらない。

あなたは知者か、それとも仁者か・・・と考えればよいでしょう。

知者を、一部の特定知識を持っている人と解釈すれば、小沢一郎さんが浮かびます。小沢一郎さんの大訪中団は、何をしに行ったのでしょうか。

八佾篇に「王孫賈 問いて曰く、其の奥に媚びんよりは、寧ろ寵に媚びよ・・・」という文章があります。衛の国の実力政治家が孔子に「あなたは我国の君主に会って親しくお付き合い始めようとするよりは、この国の実力者である私と親しくすることによって、あなたの欲しいポストを得て実力を振るえばいいじゃないですか」と言ったところが、孔子が「私はそういう道は選ばない」と答えた、という会話です。当に小沢さんは、寵（かまど）は私だから、私と付き合うことによってこそあなたの望むものは手に入るのではないか・・・というような感じではないかと思います。

しいわ ただ じんしゃ よ ひと よみ よ ひと にく
子曰く、唯 仁者のみ能く人を好し、能く人を悪む。

孔子は自分の幼馴染で、あまり働きの良くないどうにもならない幼馴染を見つけた時に、「お前はこんな長生きをしておいてはいけないではないか、人の役にも立たないで」と、杖でピシピシと叩いたという話が残っています。

仁という徳を体得している人間は、自分自身の感情の赴くままに行動してもそうそう世の中の節度を外れる事はない。多分その幼馴染も、こんな感じではないかと思います。ただ、自分で良いと思った事を行動した時に、それが度を超すと怖いと感じます。

しいわ いやし じん こころざ あ な
子曰く、苟くも仁に志すときは、悪しきこと無し。

何をするにも仁を行なおうとするならば、という前提がありますので、そうであれば悪

いことはないと考えればよいでしょう。

ここではずっと、仁とは何かを一貫して追求しています。皆さんも時々、仁とは何かをお考え戴くとよいと思います。仁とは、ちょっとした思いやりです。例えば、昨日人に不親切だったなと反省し、今日はちょっと親切にしようと思えば、それは仁が一步進んだのだと思えばよい。寝る時に嘘をつかなかったかと自問自答する中に、今日は人に親切にしたかなと加われば、仁を考える良いきっかけになると思います。

論語は、最初は意味を考えないで声を出して読むことです。そうすると、五感に何となく気持ちの良いリズムで入ってくる言葉がある。その次の段階は、これはなかなか良いと自分の波長にあう言葉が見つかりますから、それを暗記してしまうことです。暗記ができると、何か判断しなければならない時に咄嗟に思い出します。更に次の段階は、その言葉が出た時に、イメージが浮かべば良い。論語はそのように読んで戴いて、最後に、今の日常生活や社会状況と照らし合わせて読むと良いでしょう。何か自分自身の行動の判断基準となるものを、論語の中から見つけて戴ければ有難い。

今こそ山田方谷

来年は不況が凄まじい。再来年はもっと酷いことになると思っています。それに対して対策は何か・・・。

月間「カレント」誌にも書きましたが、山田方谷（1805～77）についてご紹介します。山田方谷は幕末備中松山藩の名臣で、陽明学の泰斗でした。貧乏板倉と言われた板倉藩を建て直し、旅行者が一步藩領に入れば、直ちにそれに氣付かせしめるほどに風俗を改めた経世家で、その人となりは英邁、智略に富み、尽己・尽誠一貫の生涯で、実学経綸に深く意を用いて後進を教え導いた人です。その方谷が「理財論」という論文で書いています。

1．備中松山藩は平和が続いた為に、外から敵が攻めてくるということを感じないで、上から下に至るまで皆骨抜きになったままでどうにもならない。氣になっているのは目の前の財政状況ばかりで、国もお金が無い、個人もお金が無い。備中松山藩を預かっている人達は、財政が極度に悪化してどうにもならないけれども、手の打ちようがない。破産寸前である。

2．財政が極度に悪化しているので、ありとあらゆるものに税金をかけて税収を増やそうとしたり、人件費を削ったり、無駄を省く努力をしたけれども効果がない。逆に税収が落ち込んでいる。

3．収入が減少しているけれども、支出がかさんでいる。積もり積もった借金で、松山藩が押し潰されそうになっている状況でした。

4．そういう世の中なので、役人は汚職や私利私欲に走って賄賂を取ることに血道をあげている。備中松山藩の領民は、道徳心が薄くなって、風俗・治安が乱れて、教育も乱れに乱れた。

5．備中松山藩の財政当局者は国を良くしなければならないのに、目の前の財政対策だけに血眼になって、何も考えられない状況になっている。志のある者が「それでは駄目で、基本的な国の未来・ビジョンを示さない限り良くなるわけがない」と言っても、「そんなことを言っても、目先のお金が足りないのだから、何もできない」と答えた。

これが、山田方谷が備中松山藩の現状を憂えて書いた 32 歳の時の論文です。それを元にして、山田方谷は藩政改革に取り組みました。財政再建で有名な上杉鷹山は、20 万両の借金を 100 年間で返しましたが、山田方谷は 7 年間で同じ 20 万両を生み出したわけです。20 万両は、今の金額に換算すると 320 億円です。金額の換算については、人によって大きく違います。10 万両を 100 億と換算したり、1000 億という人もいます。それぞれ根拠があるものですが、いずれにしても国家が潰れそうになるような金額を、上杉鷹山は 100 年間で返済し、山田方谷は 7 年と数ヶ月で返済し、尚且つ貯蓄もしました。

それだけ実績のある山田方谷の中身について、どういう政策をとってこれだけのことを成し遂げたのか、来年から色々な形で細かく申し上げたいと思っています。多分それがお役に立つのではないかとと思っています。

本日の講話は以上です。皆様どうぞ良いお年をお迎え下さい。